ヨーロッパの木の玩具 ードイツ・スイス、北欧を中心に
目黒区美術館特別展　2017 年 7 月 8 日－ 9 月 3 日　図録 10-16 頁

「エルツ山地の八百年と木工玩具」

ゲルマン民俗研究家　岡部由紀子

エルツ山地のおもちゃとの出会い

ヨーロッパの庶民生活から生まれた伝統的な手仕事に興味をいだいていた私は、ドイツの再統一後、チェコとの国境にある旧東ドイツの村、ザイフェンへの旅を計画した。日本でも人気のある玩具の歴史がわかる「エルツ山地玩具博物館(Erzgebirgisches Spielzeugmuseum Seiffen)」を見学したかったからだ。まず、ザイフェンの 50km ほど北方に位置するドレスデンにある「ザクセン民藝博物館(Museum für Sächsische Volkskunst)」で、予習をすることにした。

400 年以上前に建てられたルネッサンス風の館は、伝統的な民衆文化や郷土の工芸品を大切にしようという機運の盛り上がりの中、1913 年に博物館となった。館に入ると奥へと延びる長い廊下があり、漆喰を塗った真っ白なアーチ状の天井からは、カラフルな飾り物がずらっと並んで下がっている。よく見ると木製のシャンデリアで、木の心棒から太い針金の曲がった腕が八方に伸びていて、そこに木製の人形、動物、花やビーズ玉などの飾りがまとわりついている。ひとつとして同じものはない遊び精神たっぷりの燭台の行列に見とれていると、「これは蜘蛛形吊り燭台〔図 1〕といって、エルツ山地の貧しいおもちゃ職人が自分の子どもたちのために作ったクリスマスの灯りです。」と、博物館員が教えてくれた。のちに学芸員から起源に関しては諸説あると聞いたが、こんなにも心を惹きつける木工品を生み出したエルツ山地のおもちゃ職人のことをもっと知りたいと、「木のおもちゃの聖地」ザイフェンへの期待が膨らんだ。

エルツ山地はドイツ東部とチェコに横たわり、一番高い山が標高 1244m、ザイフェンは標高 650 - 700m の丘陵地帯に位置する。北から流入する寒気が滞るためか、ドレスデンに比べて春の訪れはかなり遅く冬の始まりは早い。初めておとずれたのは爽やかな気候の夏、人口 2300 人ほどの牧歌的な村に観光バスが押し寄せていた。「エルツ山地玩具博物館」の 19 世紀から現在までのコレクションは、一地域のものとしては類を見ないほどの充実ぶりで、特に草分けともいえる工人たち、今では伝説上の職人が作った木工品が、彼らの大きな写真とともに飾られているのが印象的だった。現在の制作品の展示を見て、花売りの人形と削り花細工のセットを作っているライクセンリンク工房へ足を運んだ。表通りから引っ込んだ普通の民家の玄関を入ると、右手の部屋がこぢんまりとした絵付けと組み立ての作業場になっていた。そこに人形を入れるガラス扉の戸棚がひとつ置いてある。ふとその戸棚の上に目をやって驚いた。20 年あまり前、ザルツブルクの民芸店で求めた騎馬人形〔図 2〕と同じものが飾ってあるではないか。当時は東ドイツであったこの工房で作られ、オーストリアに輸出された人形が、私の手に渡ったのだということが判明した。おまけに騎馬人形を作った工人が 73 才になって、目の前で微笑んでいる。急にザイフェンとの心の距離が縮まった瞬間だった。

ニュルンベルクが牽引した木の玩具生産

古くから木材資源に恵まれた地帯では、素朴な木のおもちゃが作られてきた。片手間に子どものために作

っていた物を行商で売り歩く者も出てきた。このような小規模のおもちゃ作りは各地に見られたが、ドイツのニュルンベルクでは木製玩具の製造が産業として発展し、16 世紀には木のおもちゃの生産と取引の中心地となった。手足が動かせる人形や、棒の先に馬の頭がついた遊具などから、やがてドールハウスとその調度品まで生産するようになる。ニュルンベルクにあった身よりのない職人の養老院「十二人兄弟の館」の記録文書に、1558 年に入居したおもちゃ職人の絵がある。彫刻刀で木の人形を彫っている老人の足元には、曲げわっぱの弁当箱のような薄い木片でできている楕円形の小箱がある。今でもエルツ山地でミニチュア人形のパッケージ〔図 3〕として使われている箱によく似ている。軽くてある程度の強度があり、おもちゃを入れて運搬するのに便利だった。東西南北に伸びる交易路の交差点であったニュルンベルクはヨーロッパ有数の交易都市、金属製品や織物などさまざまな交易品を積んだ荷馬車のすき間に詰められて、おもちゃを入れた小箱は各地へと運ばれていった。ニュルンベルクの商人は、18 世紀半ばごろに始まったエルツ山地での産業としての木製玩具生産に深く関わるようになる。

鉱山業とおもちゃのモチーフ

エルツ山地（Erzgebirge）は、もともと鬱蒼とした森林地帯だったが、12 世紀にフライベルクで銀鉱脈が発見され入植・開墾が始まり、やがて、銅、鉛、錫、鉄などの鉱石の採掘も盛んに行われるようになった。「鉱石は掘った人のもの」という領主、マイセン辺境伯のお触れにひかれて、自由で豊かな暮らしを求める鉱夫や農民がゴールドラッシュのように各地からやってきた。15 世紀にはエルツ山地のあちこちで新しい鉱脈が発見され、再び多くの人々が押し寄せ、一夜城のように鉱山都市が次々に建設され、ドレスデンより人口が多い都市も現れた。16 世紀には鉱石を意味するエルツと鉱山地帯や山地を意味するゲビルゲをあわせた地名がついた。「エルベ川ほとりのフィレンツェ」と呼ばれるドレスデンの景観と美術工芸のコレクションは、鉱山業がもたらした富の莫大さを語っている。

その財力を活用して、ドレスデンをバロック都市へと造り替えたザクセン選帝侯、フリードリヒ・アウグスト 1 世（強健王）は、1719 年、後継ぎの王子とハプスブルク家皇女との結婚祝賀行事として、エルツ山地の鉱山業関係者たちにパレードを開催せよとの命令を下した。各鉱山局は大あわてで鉱山業関係者 1,500 名を選んだ。参加者は賃金を前借りして晴れ着を準備し、採鉱から精錬、硬貨の製造までの過程を見せる工夫をし、それは盛大なパレードを繰り広げた。地底の暗闇で黙々と岩を砕く鉱夫のイメージからかけ離れた晴れやかで豪華な衣装は、「力、誇り、喜びが溢れ出る」パレードこそ富を生み出す鉱夫たちにふさわしいと考えた王の発案だった。このとき鉱山関係者の服装規定が初めて作られた。この催しは「鉱夫たちのパレード」として語り継がれ、今でも木工品のモチーフとなっている。軍人のような黒と白の制服姿の人形〔図 4〕は、正装した鉱夫や精錬工、鉱山関係の役人たちの姿を再現しているものだ。

現在、クリスマス前およそひと月に及ぶアドヴェントの時期、エルツ山地のあちこちで「鉱夫たちのパレード」の行事が催されている。参加者で鉱山業に従事している人はほとんどいないが、愛好家たちが 1719 年のドレスデンのパレードや、1830 年のフライベルクのパレードを参考にしたユニフォームをまとい、それぞれの鉱山組合の旗を掲げて胸を張って行進する。2014 年、クライマックスとなるアナベルクのパレードにはドイツ各地から 1,400 名が参加し、見物人は 5 万人も集まった。鉱山業は廃れてしまったが、身を削ってこの地に繁栄をもたらした先祖を誇りに思う人々の姿があった。

鉱夫と灯り

クリスマス前後のエルツ山地では窓という窓に燭台が灯り、暗い夜道を行く者には人家のぬくもりが嬉しく感じられる。鉱夫の仕事は三交替制で、早朝、昼、晩に交替の時刻がきた。獣脂や菜種油の灯りだけを頼りに闇の中で働き、地上に上がってきても暗いという日々が半年続くこともあり、まばらに点在する人家の窓灯りは鉱夫たちの道標であった。地中の作業は危険で、ロープに吊り下がっての地底と地上の往復での転落事故も多かった。仕事が始まる前には厳粛な祈りの時間があり、フライベルクのような大きな鉱山では現場を取り仕切る鉱夫支配人がオルガンを弾き、それにあわせて鉱夫は讃美歌を口ずさんだ。胸にカンテラを下げ、ハンマー、ツルハシとその替え刃を 15 枚ほど携えて坑内に降りる。地底では壁のくぼみに置いたランプの光のもとでの孤独な作業が待っていた。地下水の雫で火が消えると闇の中に一人取り残され、仲間が見つけてくれなければ死が待っていた。光は鉱夫にとって命の灯火（ともしび）であった。その記憶が、現在エルツ山地のクリスマスを彩る静かな灯りとなって、木工品に生かされている。鉱夫や天使が両手にロウソクをかかげる人形、アーチ状にたくさんのロウソクが灯る燭台（シュヴィップボーゲン）、ロウソクの炎が起こす上昇気流で回転する円錐形の塔（ピラミッド）、そしてドレスデンの「ザクセン民藝博物館」の廊下に飾られている木製シャンデリア〔図 5〕は、鉱夫たちの光への強い思い入れがなければ生まれなかっただろう。

木彫品から様式化された玩具へ

鉱山地帯で交わされる挨拶「グリュック・アウフ」は、「無事に上がってこい」という意味で、エルツ山地から各地に拡がった言葉だ。鉱山での仕事は若い時にしかできないきつい労働だったことと、怪我をして鉱山で働けなくなった人が多かったことが、この地で木工芸が発達した理由のひとつでもある。地下の埋蔵物を掘るためには、坑道の建設や地下水の排水が不可欠であった。そのため、高度の木工技術と巻き上げ式水汲み装置のような工夫が必要とされた。鉱山業で培われた技術が、動く玩具や上昇気流で回転する装置などに応用されていった。

木工芸といっても、高値で取引された銀の採掘で栄えた地域と、比較的安価で取引された鉱物の産地では、作られた木工品に大きな違いがあった。豊かな地域では余暇の楽しみを兼ねて大型の写実的な木彫品が作られ、ロウソクを掲げた等身大の鉱夫像が教会の祭壇を飾っていた。貧しい地域ではとにかく売れるものを、速くたくさん作ることが課題であった。現在ドイツを代表する木製玩具の産地であるザイフェンとその周辺の地域では銀は採れず、生活に困窮する人々が多い地域だった。鉱夫姿のロウソク立ては、小型の様式化された単純な造形となり、おもちゃ職人たちが手仕事で量産に携わった。他の産地で生まれた木工品は、ザイフェン特有の素朴な味わいのある玩具へと変身し、市場に送り出されていった。

鉱夫の副業、木工ロクロ細工

現在の国境線はエルツ山地をドイツとチェコに分けている。12 世紀エルツ山地のフライベルクで銀鉱脈が発見されると、新たな鉱脈をさがそうと騎士や修道士がボヘミアからやってきて、エルツ山地の開拓にあたった。ザイフェンの川で錫を発見したのも修道士だといわれている。14 世紀初めには、川の堆積物を洗って錫をより分ける洗鉱夫が住みつき、洗鉱するという意味のザイフェンという言葉が地名の由来となった。15 世紀後半からは露天掘りや坑道を掘っての錫の採掘も行われたが、自営の鉱夫たちが場所を借りて仕事を行

うという零細な経営で、鉱山業だけで生計を立てることはとても無理だった。寒冷な気候ゆえ農業収入も期待できず、鉱夫たちは周囲に豊富にあった木材を利用して木工品を作り副収入を得ていた。木の皿やボタンなどの日用品を作る木工ロクロ細工師がいたことが、17 世紀の文書に記録されている。かれらは足踏みの木工ロクロ〔図6〕を用いて家で細々と木工業を営み、自分の子どもたちのために木の切れ端から遊び道具を作ることもあった。鉱山業と同じく木工業も家族単位の小規模経営だった。

おもちゃ作りに本腰を入れる

18 世紀半ばの錫鉱山の衰退に伴い、多くの鉱夫が木工細工、特におもちゃ作りに本腰をいれるようになり、ザイフェンの木工ロクロ細工師の数は（1670 年の 23 名から 1770 年には 100 名へと）飛躍的に上昇した。ザイフェンの川沿いにあった水力を利用して鉱石を砕く「砕鉱機」は、「水力ロクロ」作業場〔図7〕に転用されロクロは賃貸しされた。水力を利用した木工ロクロはパワーがあり、大物を挽くのに適していた。一方、小型の玩具を作っていた職人は 20 世紀に入っても居間に置かれた足踏みの木工ロクロで作業した。1760 年にできた水力ロクロ作業場は、改修され建設当時の場所で、ザイフェンの野外博物館の展示〔図 8〕として現在も稼働している。

ちょうどその頃、ニュルンベルクでは地元の玩具生産者が商人を介さずに直接商品を取引するようになり、商人たちは利ざやを稼ぐことができなくなっていた。そこで彼らは、「もっとも安く作る所がおもちゃの産地となる」というモットーのもと、数多くあった各地の玩具生産地を互いに競わせて、価格競争に勝った所から安く製品を仕入れ、高く転売して儲けようとした。販売ルートを持っていなかったおもちゃ職人たちは、世界市場に販路を持っていたニュルンベルクの商人に製品を安値で買いたたかれた。ザイフェンやその周辺で作られた木工品は、ニュルンベルクの商人の手に渡った後、「ニュルンベルク製のおもちゃ」という触れ込みで数倍の値段がつけられて取引されることも多かった。皮肉なことにエルツ山地のあるザクセン王国でも、地元で作られた「ニュルンベルク製のおもちゃ」が出回っていた。

もうひとつの販売ルートは仲買問屋を通じてのものだった。仲買問屋は玩具の見本を持ち歩き注文を取り、家族経営のおもちゃ職人たちに別々の品物を指示して作らせ、できあがった物を組み合わせて製品として売った。それぞれの家で作られるものは、ミニチュア細工の羊だけだったり、家だったり、樹木だったりした。それが田舎の風景となって市場にでた。二、三種類のものだけを作っていた職人は、仲買問屋の言い値で製品を売るしかなかった。1793 年、ニュルンベルクで作られた絵入り玩具カタログを皮切りに、仲買問屋は買い手にも作り手にもわかりやすいカラーの絵が載っている見本帳を作り、おもちゃのデザイナーの役割も果たすようになる。仲買問屋の中には利益を追求するだけではなく、職人たちをリードする者もいた。ザイフェンにも先見の明のある仲買問屋が現れ、地元の職人にマッチ箱に入ったミニチュア細工を作らせ、それが世界的なヒット商品となった。ザイフェンは超ミニチュア玩具の発祥の地であり、そのことが 19 世紀の木材不足と、重量に応じて高くなる関税方式の導入を乗り切る一助となる。

画期的なロクロ技法と大量生産

木工ロクロを挽く者、彫る者、糊付けする者、色を塗る者と分業し、家族総出で早朝から夜遅くまで働いても食べられるかどうかの零細な家内工業であったおもちゃ作り。1800 年前後、効率的に製品を作ることができる画期的な技法がザイフェンで考案され、木製の動物や人形を大量に作ることが可能となった。この工法によって、木製玩具の重要な生産拠点へと発展する道が開けたのだ。その技法はライフェンドレーエン(Reifendrehen)〔図 9〕と呼ばれ、ロクロに固定した直径 40cm 近くの丸太から複雑な凹凸のあるバウムクーヘンのような木の輪を削り出し、その輪を切断して 60 体ほどのミニチュア細工の動物や人形の原型を瞬時に作るものだった。他のおもちゃ生産地では糸鋸で一体ずつ原型をひいていたので、生産コストの面からとてもザイフェンに太刀打ちできなかった。いったいどのような経緯で、画期的な技法が生まれたのだろうか。

ボヘミアガラスは有名だが、ガラスの材料となる鉱物資源と薪が豊富なエルツ山地にも数多くのガラス工房があった。その中のひとつで 1488 年からザイフェンで操業していた工房は、日用品や王侯貴族のためのジョッキやグラスなどを製作していた。1714 年火事を起こしてマイセン磁器製作所の初代所長の手に渡り、着色ガラスなどの技法の開発にも関係した。この工房で 1670 年に作られたシャンデリア〔図 10〕は、現在もザイフェンの教会の祭壇で礼拝に集まった人々を照らしている。ガラス工房では木工ロクロ細工師も働いていた。吹きガラスの外形を定める木型を作る職人で、同じ形の壺や食器を数多く作るために木型となる丸太の内部を製品の形にくり抜き、それを縦に割って２個の木型を作る。この木型を合わせて固定し、その中に溶けたガラスを吹きこみ、ガラスが冷めて固まったら木型を開けて製品を取り出した。木型は溶けたガラスの熱で焦げるのでブナなどの燃えにくい堅い木材を使用した。ワイングラスのような複雑な形のシルエットを想像しながら、はっきりと目視できない丸太の内部を木工ロクロでくり抜くには、高度の技術と勘を必要とした。そのような美術工芸の域に達した職人が、断面が特定の形になるように木の輪をくり抜く技法を考案し、ザイフェンのロクロ細工師に技術を伝えていったのではないかと推測されている。ライフェンドレーエンには、パワフルな「水力ロクロ」が役立った。「ザイフェン製品」の名も、19 世紀に入ると国内外に優良品として知れ渡っていく。

18 世紀末、おもちゃの購買層は王侯貴族から台頭してきた市民層へと拡がり、需要が急速に拡大していった。それまで大人の鑑賞品であったドールハウスは子どものままごと遊びにも使われるようになり、市場には本物の台所用品と共にミニチュアの料理器具も並ぶようになる。生活場面を再現したミニチュア模型は、家から部屋、店屋、町や村の光景へと種類を増やしていった。牧歌的な風景には、羊、牛、馬や、ニワトリ、アヒル、ハトなどの動物や樹木のミニチュア細工が欠かせなかった。19 世紀半ばからは舟の形をした箱に多くの種類の生き物のつがいを収納した「ノアの方舟」〔図 11〕が大人気となり、ドイツから大量に世界へと輸出されていった。アメリカやイギリスの厳格なプロテスタントの家庭では、「ノアの方舟」セットが「日曜日のおもちゃ」と呼ばれる特別な玩具であった。日曜の午後、親が卓上に方舟を持ち出し舟の屋根を開けてさまざまな動物を取り出しながら、旧約聖書の話や世界各地の地理、生物について話して聞かせた。世界の子どもたちの目を輝かせたミニチュア細工の動物たちは、エルツ山地のおもちゃ職人の子どもが眠い目をこすりながら夜なべ仕事で色を塗ったものだった。ライフェンドレーエンの技法は大量の注文に応じることには役立ったが、おもちゃ職人が零細な家内工業から抜け出すには十分ではなかった。

ザイフェンのおもちゃ学校とクリスマス飾り

1852 年に、ザクセン王国がザイフェンに設立した「おもちゃ専門学校」は、工業化の波と国際的な価格競争の中で安価で低品質の製品作りへと流れる傾向に歯止めをかけた。20 世紀に入ると、アルビン・ザイフェルトやマックス・シャンツなどの優秀な指導者が、伝統技法を復活して時代に即した新しい美術工芸の域に達する造形を次々と生みだし、地元の玩具産業の活性化に貢献し、優れた職人を育成した。「エルツ山地玩具博物館」の貴重なコレクションは、伝統技術を学ばせるために学校が収集し保存した木工品に端を発している。おもちゃ専門学校の主導で、ランタンを持ってクリスマスイヴの礼拝に出かける人々の人形や、ザイフェンの八角形の小さな教会、おもちゃ売りの子どもなど、クリスマスにちなんだモチーフの木工品が多く生まれ、現在のエルツ山地を代表する工芸品や土産物へと繋がっている。

東ドイツの時代を経てふたつの道を辿る木工品

現在ザイフェンを中心としたエルツ山地で作られている木工玩具は、大きく２種類に分かれる。ひとつは、成形の段階で一部機械ロクロなどの力を借りることもあるが、彫刻や色づけなど多くの作業を手仕事で仕上げる家族経営の小規模な工房の制作品。伝統技法を駆使してごく少ない人数で仕事をこなし、一人が複数の製作過程に関わっている。限られた数しかできないので、市場に出回る品物は多くはない。もうひとつは、旧東ドイツの国営工場の流れを汲む分業体制で量産される木工品で、手仕事でも一人が受け持つのはごく限られた作業、例えばくるみ割り人形の髭を貼り付けるなどである。社会主義体制になり、11 人以上の従事者がいた工房は強制的に国有化され、合併して大きな工場に再編され、流れ作業で玩具の大量生産に携わった。1990 年のドイツ再統一後、再び独立して昔のデザインを復活させている工房も多いが、量産体制を維持して大規模生産を続けている企業もある。世界市場に出回っているエルツ山地の木工品は、当然ながら圧倒的にこれらの企業の製品である。中国などで作られる模造品も数多く流通していて、ドイツ各地のクリスマスマーケットでも粗悪品をみかける。

本展開催の折り（2017 年 7 月）来日して、ライフェンドレーエンの技法を披露するクリスチアン・ヴェルナー氏〔図 12〕の父は、ザイフェンのおもちゃ専門学校で切磋琢磨した卓越した工人であった。少人数の工房だったので東ドイツの時代も合併されず、独立した工房として妥協せずに仕事を続けた。その姿勢が３人の息子に引き継がれ、それぞれがすばらしい仕事をしている。クリスチアン・ヴェルナー氏は、「昔はザイフェン全体がひとつの傘の下に入っているようで、それぞれが分担してものを作っていた。ミニチュアの樹木や顔料が必要なら、他の人から買えばよかった。今は満足のいくものが手に入らないので、全部自分たちで作らなければならない。でも、常に高い所を見つめて挑戦し続けるのが自分の道だ。」と、話してくれた。初めての日本での実演に向けても、２月に伐採した材料の丸太を４月末にチロルまで取りに行き、運搬可能な木工ロクロ台を細心の注意を払いながら新たに組み立てていた。彼の中に宿っているものは、まぎれもなくエルツ山地に生きた鉱夫や工人たちに受け継がれてきた魂と技だ。そしてそれは、ただ可愛いだけではない小さな動物や人形として結晶している。

＜参考文献＞

【エルツ山地玩具博物館（Erzgebirgisches Spielzeugmuseum Seiffen）刊行の書籍】

Hellmut Bilz : *Museumsführer, Schriftreihe Heft 1 ,* 1990（博物館刊行物 1 号）

Konrad Auerbach : *Seiffener Weihnacht, Schriftreihe Heft 5 ,* 1991（博物館刊行物 5 号）

: *Museumsführer, Schriftreihe Heft 17,* 2000（博物館刊行物 17 号）

: *Erzgebirgisches Freilichtmuseum Spielzeugdorf Seiffen, Kleiner Museumsführer,* 2000

Albrecht Kirsche : *Vom Glasmacher zum Reifendreher* , 1994

【エルツ山地玩具博物館サイトに紹介されているその他の刊行物】

http://www.spielzeugmuseum-seiffen.de/publikationen_spielzeugmuseum.cfm

【エルツ山地玩具博物館サイト内のデジタル資料】

http://www.spielzeugmuseum-seiffen.de/spielzeugmuseum_downloads.cfm

Walter Werner 他: *Gedrechselte Geschichte - Bergleute und Fürsten,* 2005

Walter Werner : *Seiffen in acht Jahrhunderten,* 2017 再刊

Ehrhardt Heinold 他 : *Erzgebirgisches Spielzeug - ABC,* 2002

本稿の執筆にあたり、「エルツ山地玩具博物館・ザイフェン」の館長 Dr. Konrad Auerbach 氏に、数々の疑問点についてご教示くださったことへの御礼を申し上げます。またインタビューに答えていただいた工人の皆さまに心から感謝いたします。

イラスト：エルツ山地玩具博物館提供　写真：岡部由紀子撮影